

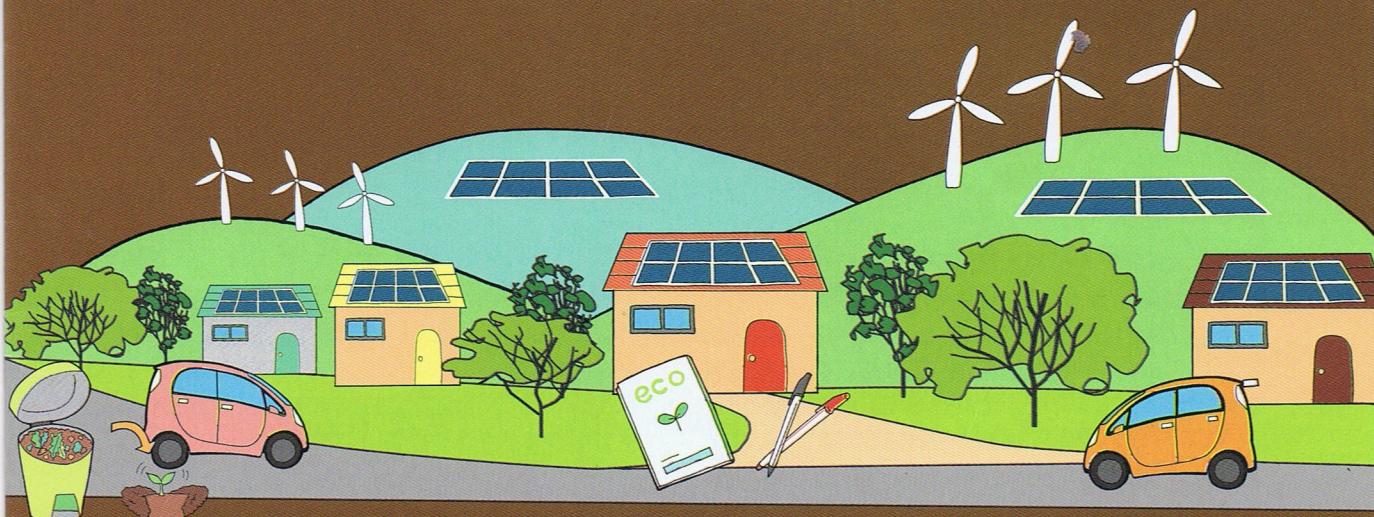
# エコ かわら 通信

第21号

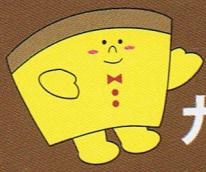
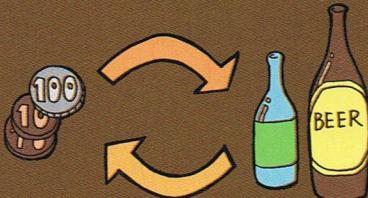
2013.10

温暖化防止かわら版

<http://nccca.jp>



身近なエコ活動を  
見てみよう!  
参加してみよう!!



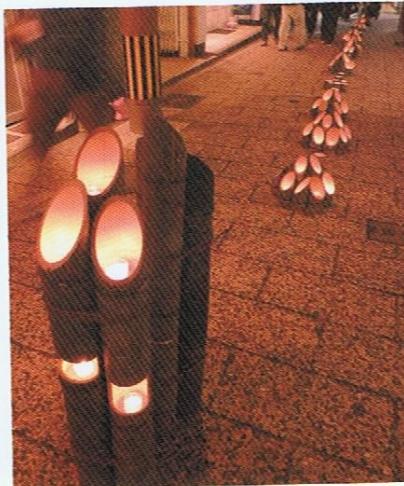
九州エコライフポイントが始まるよ。



# 竹林整備を若者が担う! スーパー女子力!?で突き進む

子どもたちの自然体験が環境保全への活動につながる…。

自分自身もやって楽しい、伝えて楽しい。でも生傷は絶えない、生月さん。



学びの場「へんちくりん」を主催  
**環境保全教育研究所**

生月菜々子さん

環境保全教育研究所では、環境保全を目的に竹林整備を行いながら、大人も子供も一緒に遊べて学べる「へんちくりん」という場を提供しています。主な活動場所は長崎市田手原町付近の竹林。「へんちくりん」では、夏は竹を使ったそうめん流しをしたり、冬には竹灯籠を作り商店街を温かく照らすイベント等を行っています。

代表の生月さんにお話を聞き、「へんちくりん」にお邪魔しました。活動を始めたのは、2011年。当初は、子供たちと竹林で遊び、自然体験を通した教育の場を提供できればいいという目的だったと言います。活動をしていくうちに、里山の問題が見えてきて、竹林は必ずしもいいというものではないということが分かってきました。そこで、現在は子供たちの学びの場を作りながらも、どのように地域の竹林整備を行っていくべきか考えながら活動を行ついるそうです。

「竹林整備の必要性は実はあまり理解されておらず、たけのこが採れるからいいんじゃない?と思う人が多いくらいです」とのこと。「事務所の裏は、以前は地区の公園でした。それが今は一面竹林になっています。竹林は放つておくと1年で周囲に7メートルも地下茎を伸ばし、あつという間に広がってしまいます。しかしそれを一気に切つてしまうと、土が流れやすい状況となり、斜面の崩壊が起きやすくなってしまいます。竹林整備には長い時間と手間暇が必要です」と真剣に話してくれました。

## ●生活習慣の変化も里山が荒れた理由

昔はたけのこを探り、生活の中でざるやかごの竹製品を使う等、竹は人々の生活と密接な関係を持っていました。

ところが現在では、竹の代わりに100円ショップ等で、プラスチックの製品があふれています。生月さんは「現在は竹製品を作つても、需要がない。需要がなければ、もの

を作つても売れずに、事業が成り立ちません。売れるようにするために、製品としての耐久性や販売先の研究を大学と協力して行い、商品に付加価値がつくようになればと思っています」と力強く話します。

「2011年から始まった活動は、今年で3年目。今年は活動の基盤を作り上げたい。今後、どういう形で活動を継続していくか、真剣に考えていかなければならない時期もあります」と、課題についても語ってくれました。

## ●気づいてみたら、多くの人と関わっていました。

「へんちくりん」の1回のイベントで関わる人数は、30人~160人とはらつきがありますが、2011年から活動を始めて、1年で大人・子供合わせて400人、2012年度は600人と徐々に参加者が増えてきており、2013年は800人を目指して活動しています。「きちんと数えてみたら、自分でもびっくりするくらいの人数です。」と驚く生月さん。そして一番の驚きは、「竹林未整備の時と比べて、周辺の里山が本来の自然に近い森林の形になってきたことなんです。森林の中にも日が射ってきて雑木の木が育ち始めました。日々の活動で生傷は絶えませんが、それも活動の証です」と嬉しそうに話してくれました。

現状の課題をしっかりと見つめて、活動を継続していくとする生月さんの意志は固く、周りの仲間に支えられながら、これから竹のようにまっすぐに伸びる活動へと成長する気概を感じました。



【環境保全教育研究所】  
代表 生月菜々子  
〒851-0252 長崎市田手原町646  
Nanako-ikitsuki@hotmail.co.jp